大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

絵入根本『俳優浜真砂』をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 眞澄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011076

絵入根本『俳優浜真砂』をめぐって

河合眞澄

一　椿亭文庫蔵『俳優浜真砂』

大阪女子大学椿亭文庫[1]には、絵入根本『俳優浜真砂』が所蔵されている。本書は、安永七年四月四日から、大坂、角の芝居小川吉太郎座の三の替りとして初演された歌舞伎『金門五山桐』の絵入根本である。本稿では、絵入根本『俳優浜真砂』を紹介し、そこから推察されるいくつかの事柄を述べる事とする。

以下に椿亭文庫蔵『俳優浜真砂』の書誌を記す。用字は通行字体とした。

〔書型〕　半紙本。

〔巻冊〕　五巻八冊。

〔体裁〕　袋綴。

〔表紙〕　原表紙カ（各冊綴じ直した跡あり）。納戸色無地。下方に波形様の型押しあり。縦二十二・〇cm×横十五・三cm。

〔題簽〕　各冊表紙左肩に貼付。縦十六・〇cm×横三・四cm。子持枠の中に「滑稽絵本役者浜真砂　一（～八）」。

〔匡郭〕　四周単辺。序文縦十八・一cm×横十三・二cm。口絵縦十七・五cm×横十三・二cm。本文縦十七・七cm×横十三・四cm。

奥付のみ単辺の中にさらに子持枠。縦十五・六cm×横十一・〇cm。

〔丁数〕　第一冊、二十八丁（序文二丁、口絵五・五丁、役人替名付〇・五丁、「巻之壱」本文二十丁）。

第二冊、十八丁（「巻之壱」本文十八丁）。

第三冊、三十四丁（「巻之二」本文三十四丁）。

第四冊、八・五丁（「巻之三」本文八・五丁）。

第五冊、十七丁（「巻之四」本文十七丁）。
第六冊、十六丁（「巻之四」本文十六丁）。
第七冊、十五丁（「巻之五」本文十五丁）。
第八冊、十四・五丁（「巻之五」本文十四丁、刊記○・五丁）。

〔行数〕 序文九行。本文十一行。

〔柱刻〕 書名表記なし。丁付のみ。
第一冊、「序一」「序二」「上ノ一（〜五）」「一ノ六」「一ノ壱」「一ノ二（〜二十）」。
第二冊、「一ノ廿一（〜廿八）」「一ノ二十九（〜三十八）」。
第三冊、「二ノ一（〜二ノ二十一）」「二ノ廿二（〜廿八）」「二ノ二十九」「二ノ又廿九」「二ノ三十（〜三十三）」。
第四冊、「三ノ一（〜八）」。
第五冊、「四ノ一（〜十七）」。
第六冊、「四ノ十八（〜三十）」「四ノ卅一（〜卅三）」。
第七冊、「五ノ一（〜十五）」。
第八冊、「五ノ十六（〜二十）」「五ノ廿一（〜廿三）」「五ノ又廿三」「五ノ廿四（〜廿八）」。

〔挿絵〕 第一冊、見開き三面（一ノ壱ウ・一ノ二オ、一ノ九ウ・一ノ十オ、一ノ十六ウ・一ノ十七オ）。
第二冊、見開き三面（一ノ廿一ウ・一ノ廿二オ、一ノ廿七ウ・一ノ廿八オ、一ノ三十二ウ・一ノ三十三オ）。
第三冊、見開き七面（二ノ一ウ・二ノ二オ、二ノ七ウ・二ノ八オ、二ノ十四ウ・二ノ十五オ、二ノ十九ウ・二ノ二十オ、二ノ廿六ウ・二ノ廿七オ、二ノ二十九ウ・二ノ又廿九オ、二ノ又廿九ウ・二ノ三十オ）。
第四冊、見開き二面（三ノ一ウ・三ノ二オ、三ノ五ウ・三ノ六オ）。
第五冊、見開き三面（四ノ一ウ・四ノ二オ、四ノ七ウ・四ノ八オ、四ノ十五ウ・四ノ十六オ）。
第六冊、見開き二面（四ノ二十二ウ・四ノ二十三オ、四ノ二十八ウ・四ノ二十九オ）。
第七冊、見開き二面（五ノ一ウ・五ノ二オ、五ノ八ウ・五ノ九オ）。
第八冊、見開き三面（五ノ十六ウ・五ノ十七オ、五ノ廿三ウ・五ノ又廿三オ、五ノ又廿三ウ・五ノ廿四オ）。

〔内題〕 「俳優浜真砂巻之壱（巻之二〜巻之八）」。

〔刊記〕 「天保十三年壬寅孟春発販」「書林　尾州　松屋善兵

衛　京都　吉野家仁兵衛　鉛屋安兵衛　大坂心斎橋唐物町　河内屋太助」。

二　椿亭文庫本と池田文庫本

絵入根本『俳優浜真砂』は、享和三年に初版が出された後、文化二年・天保五年・天保十三年に後刷りが出版された。椿亭文庫本は、奥付から天保十三年の後刷り本と判断される。虫損・汚損の少ない美本である。

序文は「俳優浜の真砂子序」と題して、享和三年に曲亭馬琴が江戸から書き送ったものである。[2] 書名の訓は、外題の「役者浜真砂」およびこの序文の「浜の真砂子と題する書」という記述から、「やくしゃはまのまさご」としてよい。椿亭文庫本も享和三年の初版の内容に手が加わっていないと考えられる。「松好斎のわざくれ」という表現も見え、本書の作者は松好斎半兵衛である。

阪急学園池田文庫蔵の一本は、奥付に「文化二乙丑孟春」と記されており、文化二年の再版本である。このときの版元「南紀和歌山書林　新通り弐丁目　帯屋伊兵衛」の以下の口上も掲げられている。

東西〳〵乍憚チヨト申上升

一此度未熟成る役者衆中相集め　古めかしい狂言のせりふ書并ニ役者顔にせ等不写りながら板行ニいたし奉御覧入候所御機嫌うるはしく御覧被成下候段　板元は勿論　画工并ニ彫刻に至る迄　大悦至極奉存候（以下略）

文意の読み取りにくいところはあるが、この口上によれば、この時の刊行は「未熟成る役者」の手本という意味合いを持たせているようである。しかし、口上の後の部分は明らかに読者層に対する発言であり、役者の手本にするというのは、「古めかしい狂言のせりふ書并ニ役者顔にせ」を出版する理由をこじつけたにすぎないものであろう。

再版は和歌山という地域性を持っていたが、はるか後の天保十三年版も尾州・京都・大坂の本屋の合版であったことは、絵入根本にかなり広汎な需要があったことを示している。絵入根本の内容は芝居の脚本であり、「役者顔にせ」の口絵・挿絵を擁しているため、臨場感を持って芝居を再現できる。しかも後述するように、配役は架空の理想的配役であって特定の興行の記録ではないので、出版の時日を選ばない。

椿亭文庫本の内容は、享和三年の序文もそのままで、奥付以外は池田文庫本と一致している。[3] 刷りの美しい池田文庫本に比べると、椿亭文庫本はかなり版木の摩耗が見られる刷りであり、

〔図1〕

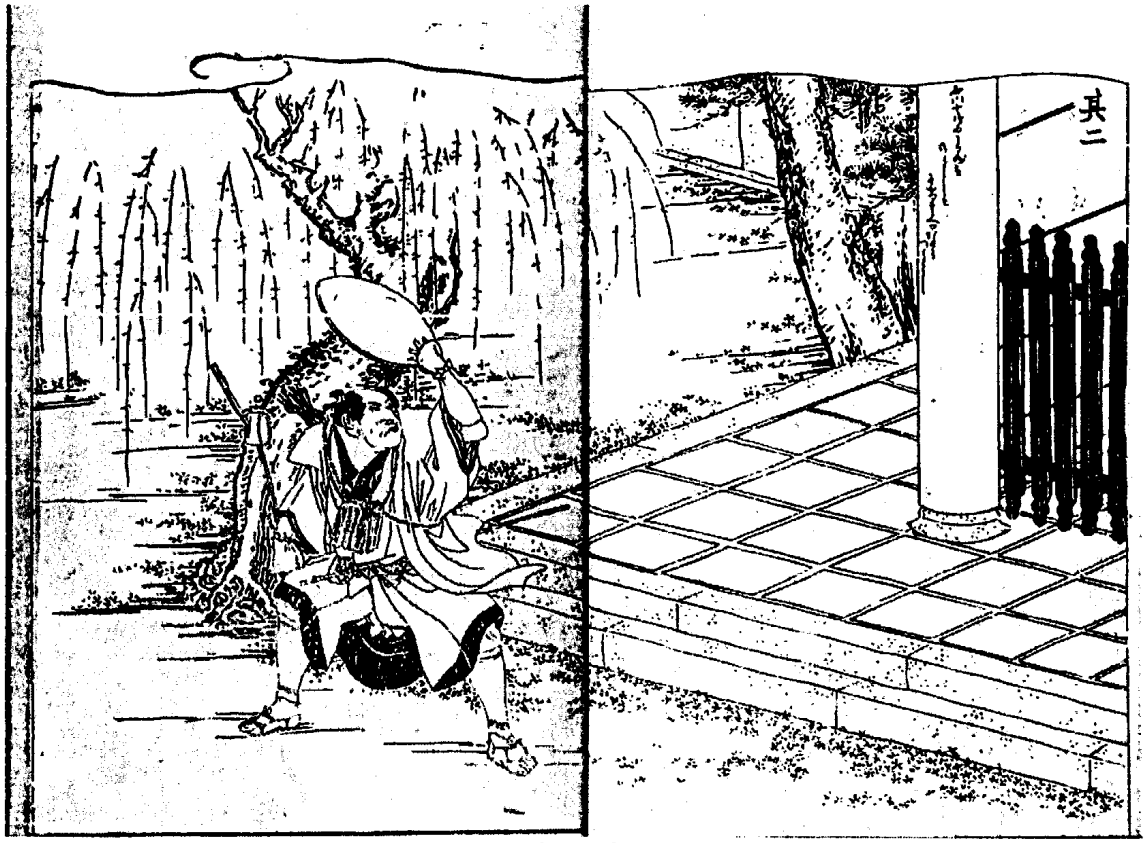
〔図2〕

〔図7〕

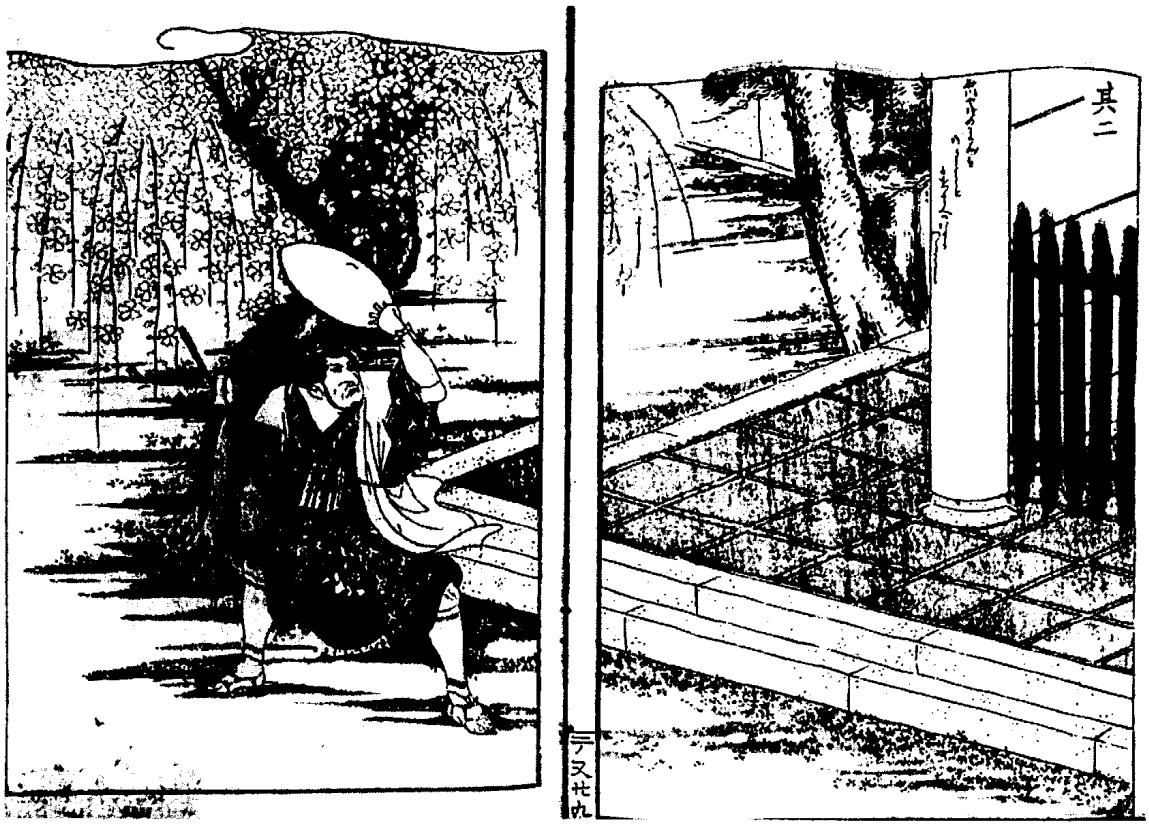
〔図3〕

〔図4〕

〔図8〕



〔図5〕



〔図6〕

長期に渉って版木が利用され続けたことを示している。口絵・挿絵は、池田文庫本に施されている薄墨の重ね刷りがなく、絵の質が落ちているが、それには拘泥せずに出版されていることも、絵入根本人気の一証である。

重ね刷りは役者の化粧や衣装の模様、背景の陰影などに用いられている。例えば、口絵の真柴久吉や順奇観は、椿亭文庫本では無地の白装束を着ているように見える（図1・図2）が、池田文庫本では衣装の柄が重ね刷りで出ている（図3・図4）。また、椿亭文庫本では真柴久吉の月代や順奇観の顎の青黛がないため、役者の表情に生彩がない。

これらの例では重ね刷りがなくとも用は足りているが、薄墨の有無が絵に大きな影響を与えている例もある。第三冊、二ノ又廿九ウ・二ノ三十オの挿絵は、現在でもよく上演される南禅寺楼門の場の巡礼姿の真柴久吉を描いているが、背景の木は、椿亭文庫本では枝が枝垂れているだけで、柳のように見えている（図5）が、池田文庫本では薄墨の桜花が一面に入っていて、紛れもなく花盛りの場面となっている（図6）。口絵の瀬川采女の手にしている扇の地紙の場合も、椿亭文庫本では凹凸がなく違和感がある（図7）が、池田文庫本では折目の陰影が刷り出されている（図8）。

三　口絵の狂歌と役者

口絵は「金門五山桐」の題名と主な登場人物十人の姿絵になっている。役者似顔であることは、言うまでもない。姿絵にはそれぞれ一首ずつの狂歌が付されていて、外題の「滑稽絵本」の謂いになっている。口絵の翻刻を次に掲げ、簡単な注を付す。翻字には通行字体を用い、また便宜上、番号を付しておく。

1　真柴久吉　市川市紅

忍び寐の枕言葉やぬは玉の夢に恋しき姿三河や　　雪月庵花咲成

○市川市紅―四世市川団蔵（延享二年―文化五年）。
○枕言葉―「枕」と「枕言葉」を掛ける。
○三河や―「見る」と団蔵の屋号「三河屋」を掛ける。
○雪月庵花咲成―花咲也とも。通称武蔵屋重兵衛。大坂の人。

2　石川五右衛門　嵐小七

こひちには忍ひの術や親の眼を盗む性根の玉てこそあれ　　醤油産人

○嵐小七―三世嵐小六（寛保元年―寛政八年）。初代

嵐雛助の名で知られる。
○盗む―「眼を盗む」と「盗む性根」で上下に繋がる。
○玉―小六の別称。「上ミ方にて玉といへは吉田屋（引用者注―小六の屋号）とおもふは、犬うつわらんへまて合点なすは、実名人のしるしと諸人のなつとくする嵐小六」（玉の光・上）。

3 此村大炊之助　片岡我童

逢事はかた岡なれやきぬ〳〵のほかにも袖のひきておほいそ　軸人

○片岡我童―七世片岡仁左衛門（宝暦五年―天保八年）。
○かた岡―「難し」と「片岡」を掛ける。
○おほいそ―役名の「大炊」と「多い」を掛ける。

4 園生方　瀬川路考

誰も恋したへる菊のたち姿そのふにかくれない色香して　蕪坊

○瀬川路考―三世瀬川菊之丞（宝暦元年―文化七年）。享和元年、将軍家に菊千代君が誕生したため、瀬川路考と改名。
○菊―「菊之丞」を菊の花に見立てる。
○そのふ―花を植える「園生」と役名「園生の方」を掛ける。
○蕪坊―青々園、茶臼山人とも。大坂の医師。

5 順奇観　嵐璃寛

矢田平で有た夜なよな思ひ寐のゆめにも見たき此男ふり　八重垣歌国

○嵐璃寛―二世嵐吉三郎（明和六年―文政四年）。
○矢田平―順奇観の仮の姿の役名。
○有た夜なよな―「あったよな」と「夜な夜な」を掛ける。
○八重垣歌国―大坂の狂言作者浜松歌国。通称布屋清兵衛。考証随筆で知られる。

6 金吾久秋　嵐雷子

我おもふ中は隔そ恋ころも袖のかすみのひくてあまたに　瓦鬼面

○嵐雷子―三世嵐三五郎（？―天保九年）。
○ひくて―「（霞が）引く」と「引く手」を掛ける。

7 瀬川采女　先嵐来芝

名残おしう別るゝ空の横かすみひくきぬ〳〵や袖のぬれこと　始松成長

○先嵐来芝―二世嵐三五郎（享保十七年―享和三年）。

寛政九年に引退。

○ひく―「霞引く」と「引く衣」で上下に繋がる。

○きぬ〳〵―「衣」と「後朝」を掛ける。

8 傾城花橘　芳沢巴江

今宵こそ首尾よし沢とはつ恋のかほにもみちのいろは染けり　松好斎

○芳沢巴江―初世芳沢いろは（宝暦五年―文化七年）。後に五世芳沢あやめとなる。

○首尾よし沢―「首尾良し」と「芳沢」を掛ける。

○いろは―「色は」と役者名の「いろは」を掛ける。

○松好斎―松好斎半兵衛。大坂の画師。本書の作者で、劇書や絵入根本を多く手掛ける。

9 真柴久次　中村芝翫

幾千世とかわらぬ恋の中むらそちきりそめぬる袖の友鶴　此花咲芳

○中村芝翫―三世中村歌右衛門（安永七年―天保九年）。

○中むら―「仲」と「中村」を掛ける。

○友鶴―鶴は歌右衛門にゆかりの意匠。

○此花咲芳―暖江亭。通称備前屋又八。大坂の人。

10 早川高景　関小太

落て来ぬ君はくせもの立役のさはきかねたる恋の関三　梅好

○関小太―初世関三十郎（延享四年―文化五年）。

○恋の関三―「恋の関」と「関三」を掛ける。関三は関三十郎の通称。

○梅好―北窓梅好。通称米屋重兵衛。大坂の人。ただし、大坂の書肆金西館の主人陰山白縁斎も梅好の号を用いており、どちらであるかは特定し難い。

当時の上方狂歌壇の状況はいまだ明らかではなく、ここに見られる狂名も、どういう人物であるのか、半数は特定できない。この口絵に添えられた狂歌が、すべて当該の役者に対する讃辞であることは言うまでもなく、当時の狂歌壇や役者の贔屓を考える資料となり得るものである。

口絵に描かれた十人の内、2の三世嵐小六は、初版の出された享和三年の時点ですでに故人となっているが、『俳優浜真砂』では主役の一人石川五右衛門を勤めている。また、7には寛政九年に子息に名を譲って引退している先代（二世）嵐三五郎が登場し、6の三世嵐三五郎と共演しているかのように仕組まれ

ている。これらは現実にはあり得ない事で、『俳優浜真砂』の配役が、想像上のものである事が判明する。ただし、2の三世嵐小六と7の二世嵐三五郎以外は、すべて享和三年に京都あるいは大坂の芝居に出演している役者であって、少なくとも初版出版時の上方役者に限定した配役である。しかし、三世嵐小六と二世嵐三五郎を除いても、当代の上方を代表する残り八人の大物役者が同座する事は考えられない。あくまでも夢の大一座の理想的配役と言える。

絵入根本『俳優浜真砂』で取り上げられた『金門五山桐』に最も縁が深いのは、2の三世嵐小六である。安永七年の『金門五山桐』初演時には、三世嵐小六（この当時は前名の嵐雛助）が石川五右衛門を勤め、大評判となった。[4] その後、安永九年には京都で同役を勤めて大当りを取り、[5] 寛政二年にも大坂で三演した。[6]『釜淵双級巴』や『木下蔭狭間合戦』など他の狂言でもしばしば石川五右衛門役を勤め、いずれも大出来とされ、[7] 三世嵐小六畢生の当り役となった。小六は、寛政八年、次の興行の稽古中に急死したが、その時予定されていた役も『艶競石川染』の石川五右衛門であった。[8]

また、所作事を得意とした小六は、『七宝浜真砂』と題した変化舞踊を演じて評判となった。[9] 本書の書名『俳優浜真砂』が、『金門五山桐』の中に用いられた俗伝の石川五右衛門の詠歌「石川や浜の真砂は尽きるとも世に盗人の種は尽きまじ」から出ている事は疑いないが、小六の所作事『七宝浜真砂』の題も、なにがしかの影響を与えたものと思われる。

『金門五山桐』の題には、「石川五右衛門忍術の事　瀬川采女艶書の事」という角書があって、[10] 瀬川采女は石川五右衛門と並ぶ重要な役であり、初演では座本の小川吉太郎がこの役を演じた。内容からすれば、役としては真柴久吉や此村大炊之助の方が比重は大きいが、[11] 瀬川采女は五右衛門の異母弟という設定になっていて、構想上石川五右衛門と対を成している。『俳優浜真砂』では、二世嵐三五郎が瀬川采女役で登場している。三五郎の紋は丸の内に桐の古文字、替紋は五三の桐である。[12] 俳諧の付合的連想から、三五郎もまた『金門五山桐』に結びつく。

三世嵐小六が没した寛政八年の位付は、惣巻軸、無類上上吉、[13] 二世嵐三五郎の引退した寛政九年の位付は、惣巻頭、大至極上上吉で、[14] この二人が当時の上方劇界の両雄であった。二人を回顧する事が、『俳優浜真砂』刊行の動機の一端であったと推測される。

四　南禅寺山門の場

『金門五山桐』の内、現在でも上演の機会の多い南禅寺山門（楼門）の場を、『俳優浜真砂』から試みに翻刻し、初演台帳と比較する。この場は、『金門五山桐』の二つ目の切に当る。ト書きとせりふはすべて追い込みで書かれているが、翻刻に際して、便宜上ト書きとせりふは改行した。せりふの二行目以下は行頭を下げた。ト書きは原況の割書を小字で表わし、せりふより下げて表記する。用字は通行字体を用い、適宜空白を設けた。誤字や宛て字等は改めず、誤字および誤読のおそれのある宛て字については、後に注を付す。

又返し　右の高へい東へ引て取る　と黒まく切ておとす　と送り物①山門の二重　とびら前高らん　たるき　升形よろしき②右三③の両わきに一面のさくらのはなに　前のふみ込のまへかすみにて下かくれて有　此縁先へ　五右衛門高らんにもたれ　ふとききせるにてたばこをのみ　四方の風けいを見ている見へにて　此道具まへ江つき出す　かすかに禅のつとめ木魚にて　是を合方に成④　と五右衛門方々見まはし

五右衛門　はるのなかめをあたい千金とはちいさいたとゑ　五右衛門がためには此あたへ万両　最はや日もにしにかたむき　誠に春のゆふぐれのさくらも一しほ〳〵　ハテうら、かな詠じやなア

とキセルくわへ　はらばいに成て見る　と鳥やのうへより　少々どろ〳〵にて　さいぜん大炊がはなせししらふの鷹とんで来て山もんのかうらんにとまる　五右衛門きつと見て

ハテこゝろへぬ　我をおそれず此鷹羽⑤を休るは

ととつくりと見て

此鳥は正しくゑ⑥がける名画の筆勢ひ　しかもしらふ　殊に羽表にしるせし文字は

トこなし有て　鷹をこぶしにすへ　よみくだし

五右衛門　こりやこれ慥か此村大炊之助が手跡　よく〳〵見て⑦何々　その方某かねて申合せしとおり　久次をおとりに四海を当手握るとはかりし所⑧　かへつて久次　高景がけいりやくによつて　年来のたいもふむなしくろけんなすものなり　ムウ　スリヤ此村が反逆は顕れしとな

とむかふをきつと見て

ナニ　たのみおき候一義　某し元は大明十二代神宗皇帝が臣下宗蘇卿と言しもの　本国に一子をのこし　日本をくつがへさんと此土にわたり　謀反のくわだて　今日只今露

顕なし　たとへむなしく相果るとも　彼地にのこせし悴れ我をしとふて日本へわたりしと粗聞と　いまだ対めんはとげず　此悴強猛不敵の産れつき　筐みに添へし蘭奢木といふ名香をしやうこに　なにとぞたづねいだし　我無念をかたり　力を合し久吉を討とる

トよむ内　いろ〳〵思ひ入有て

ヤア　すりや此村大炊之助といひしは　我父宗蘇卿にてありしか　しらぬ事とは言ながら　生死の程も気遣はしく我おさなきとき　風波をしのぎ此土へわたりしも　わかれし父にたいめんとげん為　ほう〳〵さまよふ其内ニ　竹地光秀どのに養育にあづかり　せいちやうして名も惟任左馬五郎と呼る　しかるに竹地氏の仇に信長父子を討とり⑨武将と成て都の地賢をゆるす　是に下人　百性　諸大名も帰状をなすも　わづかの日数立ざる内　大領久吉の為にほろぼされ　無念の最期　其恩をうけし我なれば　光秀どの、とむらひいくさ　久吉を討取んと　討死をと、より⑩今石川五右衛門と名のりはいくわいなすも　人をかたらひ久吉を討とる手立　所々国々へ別れし父宗蘇卿も　久次高景がはからひにて大望顕れ　生死の程も覚束なし　無念なは　是まで心を合せし此村　父とも又我を悴とも　たがひニしらぬ親子のしんくわい　鷹のしらせも無ねんの密書　なにとぞ□⑪あるならば　心一致にほろぼすけいりやく　おのれ久吉　父の無ねんに光秀公の恨み　たとは、⑫事顕はれ　たとへ油で煮られて肉がとろけ骨はくだかる、とも　此無ねんはらさで置ふか

トきつと成ておもひ入あり　よろしく見へて⑬　チヨン〳〵にて

○　此道具段々せり上てくる　山もんの下のいしだんに　ひさよし　もめんやつし　じゆんれいのかたち⑭にて　おいづるをかけ　笠こしにたずさへ　杖のさきに筆をくゝり付　山もんのはしらに落書をしている見へ　東西のこらずさくらの三木⑮顕れ道具見事にとまる　じゆんれいかきしまひ　花道角へくる　五右衛門心へぬと下を見る　ふりかへつて

順礼　石川や浜の真砂はつきるとも

トよみ上る

五右衛門　ヤアなんと

順礼　世に盗人のたねはつきまじ

と見上ゞ見下し　たがひニかほを見て

五右衛門　さてはうぬ

と手裏剣打　順礼杓にてくわつしと受

順礼　順礼に御ほうしや

と両方とたんの見へにて　幕

①「造り物」であろう。台帳「造物」。
②「よろしく」の方が自然。台帳「宜敷」。
③「山門」であろう。台帳「山門」。
④「是を合方にて」の方が自然。台帳「是を相方にて」。
⑤一語ではなく、「鷹の羽」とあるべきところ。
⑥訓は「まさしく」の方が妥当。
⑦「よく〳〵見て」は卜書きにするべきところ。
⑧「掌握」とあるのを読み違えて、「当手握る」と意味不明の表現にしたものであろう。台帳「掌握」。
⑨「信長」と実名が出るのは不審。台帳「春永父子」。
⑩「と、まり」であろう。台帳「とゞまり」。
⑪摩滅により判読不能。ルビの「な」がわずかに見えているので、「存(ながら)へ」か。
⑫「たとへ」の方が自然。
⑬「見へにて」の方が自然。
⑭「形」とあるのを開いて読んだか。「なり」であろう。
⑮「幹」の宛て字。

初演の台帳[15]と比較すると、この場面は、細部の表現までかなり忠実に踏襲していると言える。大きく異なるのは次の点である。

・台帳では、此村大炊之助の密書が袱紗に書かれているが、絵入根本では、鷹の羽表に書かれている。白斑の鷹という設定は、後者で生きてくる。

・台帳では、宋蘇卿の密書に「唐と日本に三人の子供」と出てくるが、絵入根本では、「彼地にのこせし悴」しか出てこない。この場面が独立して上演されるならば、後者の方が人物関係が簡潔でわかりやすい。

・台帳では、順礼姿の久吉は草井戸に五右衛門の顔を映して見る事があり、落書の条はない。絵入根本では、順礼（久吉）は山門の柱に落書をしている。後者の方が、演出効果が高いと思われる。

・台帳では、幕切れに五右衛門が袖で顔を隠す。絵入根本では、両方の「見へ」で終わっている。五右衛門が堂々としている後者の方が、役に適った演出と思われる。

これらは、初演から後、上演を繰り返して行く内に演技・演出が洗い上げられ、その結果が絵入根本に反映されたものであろう。台帳と絵入根本の比較により、演出の変遷を跡づけることができるのである。

なお、絵入根本の本文は、文脈の通じにくい箇所や明らかな誤りを多く残していて、綿密な校訂を経たものとは言い難い。台帳を原本として作られた本文であると思われるが、直接芝居

に関係しない校訂者の手で編集された可能性が窺える。「滑稽絵本」と銘打っているところからしても、絵入根本の特徴は口絵・挿絵にあり、本文の精度はあまり求められなかったものであろう。絵入根本の本文研究は今後の課題であり、台帳と併せ読む事によって新たな視野が開ける事が期待される。

〔注〕

(1) 大阪女子大学名誉教授土田衛氏の寄贈された文庫。

(2) 馬琴の序文については、『読本研究新集』第四号掲載予定の拙稿「絵入根本『俳優浜真砂』の曲亭馬琴序文」参照。

(3) 池田文庫本は、全巻を一冊にまとめて表紙を付した一冊本である。

(4) 亥（引用者注―安永七年）の春…続て金門五山桐の石川五右衛門是又格別の大出来世に知る所なれども　五右衛門の狂言多き中に始中終とも此仕打を専らとして眼を驚かすばかり」（眠獅選・下、引用は『上方役者一代記集』による）。

(5) 「同九子年（引用者注―安永九年）二の替りは金門五山桐　石川五右衛門にての大当り」（同）。

(6) 「寛政二…夫より金門を出して　五右衛門は毎度にかわらず面白がらせ」（玉の光・下、引用は『上方役者一代記集』による）。

(7) 「同七未（引用者注―天明七年）…次に釜が淵の五右衛門にて又候大入　めづらしき程の繁盛にて」（眠獅選・下）。

「同九酉年（引用者注―天明九年）…夫より木下蔭狭間合戦を出し…齋藤道三をつとめ　竹中官兵衛と石川五右衛門の三役　誠に古今の出来」（同）。

(8) 「寛政八…三の替新狂言艶競石川染のかんばん出し所…五右衛門　石田の局　千の利休の三役にて…三月廿九日惣けいこの日…にはかに急病さしおこり　医療さま〳〵手を尽したれとも　無常の風にさそわれて　つゐに黄泉の客となられ」（玉の光・下）。

(9) 「同五巳（引用者注―天明五年）…大切に浜真砂の所作事」（眠獅選・下）。

「同六午（引用者注―天明六年）…切に七宝浜真砂の所作事」（同）。

(10) 番付および初演台帳（『歌舞伎台帳集成』第三十六巻所収）による。

(11) 初演時には、初世尾上菊五郎が勤めている。

(12) 「嵐三五郎…紋は丸の内に桐の古文字　替紋は五三の桐にて」（桐の島台・上、引用は『上方役者一代記集』による）。

(13) 『役者御吉慶』による。

(14) 『役者大雑書』による。

(15) 『歌舞伎台帳集成』第三十六巻による。

椿亭文庫を御寄贈いただいた土田衛名誉教授、資料の閲覧・撮影・掲載に御高配いただいた池田文庫、北川博子氏に謝意を表します。

（かわい　ますみ・本学教授）